

令和3年12月1日

敬愛短大附属幼稚園だより 12月号

今年も今月で終わります。この2年間は新型コロナウイルスの感染予防のため、多くの幼稚園行事が縮小や中止となり、子どもたちも楽しみにしていたことが十分にできずに消化不良となってしまったことに先生方も心を痛めています。

でも、できることは手を尽くそうと、登園自粛期間中にも子どもたちの役に立つ楽しみの場づくりを積極的に進めてきました。慣れないノコギリやくぎ打ち等、手に傷をつくりながら、それでも楽しく遊ぶ子どもたちの笑顔を想像しながら環境づくりが進みました。

次は1年間かけて子どもたちが大好きな幼稚園で見られる様々な生き物の写真集として「けいあいいきもの図鑑」を作ろうと考えています。子どもたちはダンゴムシも好きですが、それだけでなく多様な生き物の生態に目を向けられるように科学的環境の整備と活用を進めていきます。

先日にもトンボのアキアカネが2匹ペアになって園庭の水たまりに産卵のために訪れていました。また、子どもたちは園ではあまり見かけないアマガエルもを見つけました。アゲハチョウのような少し大きな生き物から小さな幼虫まで様々な生き物が探してみると園内に住んでいることが分かります。また、動物だけでなく、植物にも目を向けると、「かがくのかだん」や「野草園」にある植物からもたくさんの小さな種子が採集でき、良く観察すると芸術的で様々な形や模様を見つけることができます。

このように“よく見る”ことによって、それまで見えていなかったことがたくさんあったことに気づきます。この行動が大切で、見えなかったものを意識して見るということが多くの気づきを私たちに与えてくれます。保護者の皆様方も来園の際はぜひ子どもたちと小さな自然の探究をお楽しみください。

—満天の星空のもとで親子の会話をしてみませんか—

昭和40年代の私の高校時代。千葉市では北極星が良く見えていました。もっとも今では視力の低下と光害の影響もあって私にはかつての北極星は見えませんが、少し足を延ばしてみるとたくさんの星たちを見ることが出来る場所は県内にたくさんあります。

一眼レフカメラかミラーレスカメラと三脚さえあれば星座やたくさんの星たちを撮影することが出来ます。カメラを三脚に固定してISO感度を1600ほどに設定し、ピントは手動で無限大。2.0秒ほどシャッターを開放できるようにしてあげれば天の川だってきれいに撮影できます。取り扱い説明書で手動への切り替え、ISO感度やシャッターの開放時間の調節方法を調べてみてください。月が出ていない時がチャンスです。月の様子はネットで「月齢カレンダー」で検索すると良いでしょう。何月何日にどの方向に月がどのように見えるかもすべてわかります。（月の出や月が地平線に沈む時間も出ています）

また、ネット上でも天体の簡易な撮影方法はたくさん出ています。特に最近はキャンプがブームですから、自然の中で満天の星空のもとでの親子の語らいは一生記憶に残ります。

私は三宅島で見た満天の星空が忘れられません。そこでの星空はものすごくすぐ近くに見え、それはそれは感動しました。こんなすごい星空を見た印象は強烈でした。

これから益々寒くなってきますが、そうした時の晴天の空は私たちにロマンを与えてくれます。今年は360°カメラで全天の星空と流星を10秒間に一回シャッターを切りながら（インターバル撮影といいます）4～5時間ほど自動で撮影しようと考えています。また、同時に、地球の自転に合わせて動く赤道儀にカメラを乗せて星を点でとらえられるようにします。30秒以上カメラのシャッターを開放しますと、星は点でなく線として映ります。赤道儀というものを使うとカメラも地球の自転に合わせて動かすことができるので、長時間シャッターを開放しても星を点として捉えながら撮影できます。話が難しくなりましたが、満天の星空の下、親子の語らいはとても素敵ですよ。

（園長 杉山清志）